

# 子供、子ども、子どもたち、等々の表記

保育などkodomoと関わる仕事に長年携わってきた人たちでも「kodomo（子供等）ってどう書いたらいいの？」と疑問に思い、的確に答えられないことは多い。「kodomoはお供ではありません」と「供」の使用を好ましいとしない主張を耳にしたこともある。そのためだろうか、保育の世界では「子供」の表記は少ない。

過去においては「子供」表記が多く、近年では「子ども」表記が主流だ。とはいえ、過去と近年の境界は定かでない。



大野晋編（2011年）『古典基礎語辞典』に「こども/子供」の見出しがあり解説は次のとおり、//コ（子）に、**複数を表す**接尾語ドモ（供）が付いた語。//とある。

同辞典の見出し「こ/子」は示唆に富む。//小さい意を表す接頭語コ（小）と同根。古くは親から見た、息子や娘の意。コ（子）が大人に対する小児の意を示すようになったのは新しく、例も少ない。大人から見た小児はワラハ（童）・チゴ（児）という。// さらに見出し「こ/小」を探求するのが好ましいが、ここでは省略する。

では、「ドモ」を調べてみよう。「トモ」ではなく「ドモ」と濁音になっていることに注意して同辞典で調べると、「ども/共」が見つかった。//トモ（供・友）から転じた語。いつも付き従い行動するもの、並んで行動する仲間の意から、同類のものが複数あることを示す。// 語釈の筆頭に「人の複数を表す」とある。

国語国字問題をここですつもりではなく、実用的な表記はどうあればよいかという道筋を、さらにここで検討したい。

仮名で書くか漢字で書くかの選択より以前に、「（音として）ども」は複数をあらわす。漢字表記以前にkodomoは複数であり、しかも、「いつも付き従い行動するもの」ということである。kodomoの語の成り立ちからして、**常に複数としてとらえられ、固有の人格として認識されてこなかった**、ということだろうか。

kodomo一人一人を分けて人格として認め、個を尊重するという認識でkodomoに向き合うとき、kodomoをどう表記・表現すればよいのだろう。

▼次ページ

語釈

神や人を表す語に付いて複数を表す。

二 たち（達・等）接尾

語釈

①人の複数を表す。

二 ども【共】接尾

語釈

トモ（供・友）から転じた語。いつも付き従い行動するもの、並んで行動する仲間の意から、同類のものが複数あることを示す。

「注」一般には「子ども」が多く使  
われている。祝日は「こどもの日」。

こども

(小供) ↓ 子供・子ども

この記号の下にあるように書き換える

童や児で表現されていた過去は、もしかしてkodomo一人一人の人格が区別して認められ大切にされ(あるいは、そうでないかも)、「コ+ドモ」と表記する場合は個々を区別しないということか。

「子供・子ども」どちらも複数であり、どちらも「お供」である。お供でないkodomoを表記する方法は「子」と漢字1文字で書けばよい。複数表現のときは「子たち」「子ら」という表記法がある。「子どもたち」という表記は「子ども」+「たち」と複数を重ねていることに気づくだろう。

言葉にこだわりながらも、理解や認識が伴えば、表記は自由であって拘束されるものではないとわたしは考えている。だから、kodomoをどのように実際に(実用的に)表記するかは自由である。だが、kodomoとのかかわりで専門性を問われる立場にあるとき、kodomoの表記・表現は、いつも悩み続ける課題であってほしい。

## 子どもたち・子ども達

常用漢字表「付表」では「友達/ともだち」の表記が認められており、「達」は「友達」において「だち」の読みが与えられている。正確には「友達」には「ともだち」の読みが与えられていて、「とも+だち」と分けて認められているのではない。

さらに、「達」は、常用漢字表で認められている読みは「たつ」のみ。したがって、「子どもたち」を「子ども達」と表記することは、内閣告示としては誤りである。公用文でない限り、一般に慣例としての使用は誤りというわけではない。

「きょうだい」は、かな書きでよい

共同通信社『記者ハンドブック』  
第13版 2016年 第11版 2008年

↓ \* 字音・字訓で読む場合には使つてよい表記  
この記号の下にあるように書き換える

きょうだい 兄弟(姉弟)しいい  
兄妹しいまいを「きょうだい」と読ませたいときや、性別がはっきりしないときは平仮名書き)

きょうだい 兄弟(一般用語) 義兄弟、ライト兄弟

↓(「\* 姉弟、\* 兄妹」) ↓ きょうだい (男女のため兄弟がそぐわない場合や性別不明の場合) 私は姉3人と兄1人の5人きょうだい



兄弟、姉妹、兄妹、姉弟、あるいは兄弟姉妹の漢字4文字で(きょうだい)と読ませるとき、どう表記すればよいか、迷うことがある。

左のように、仮名書きが一般的になりつつある。

# 母子保健法 2023年4月1日施行で確認

(用語の定義)

第六条 この法律において「妊産婦」とは、妊娠中又は出産後一年以内の女子をいう。

2 この法律において「**乳児**」とは、一歳に満たない者をいう。

3 この法律において「**幼児**」とは、満一歳から小学校就学の始期に達するまでの者をいう。

4 この法律において「**保護者**」とは、親権を行う者、未成年後見人その他の者で、乳児又は幼児を現に監護する者をいう。

5 この法律において「**新生児**」とは、出生後二十八日を経過しない乳児をいう。

6 この法律において「**未熟児**」とは、身体の発育が未熟のまま出生した乳児であつて、正常児が出生時に有する諸機能を得るに至るまでのものをいう。

(**低体重児**の届出)

第十八条 体重が二千五百グラム未満の乳児が出生したときは、その保護者は、速やかに、その旨をその乳児の所在地の市町村に届け出なければならない。

## baby

bèbè  
フランス語

フィリップス・アリエス『〈子供〉の誕生』みすず書房 1980年 p31 // 生後数ヶ月間の子供を称する語彙の不備は依然として続いていくのである。この**語彙の不備は、19世紀以前には是正されることはない**。後に、英語から**baby**という語が借用されることになるが、この語は16世紀・17世紀には**学校に行く年齢の子供**を指していたのである。これが子供にかんする言葉と観念の最後の段階である。こうしてそれ以後、「赤ん坊」(bèbè)という言葉に、生れたばかりの小さな子供はひとつの固有の名称を見出したのである。//



## 言語 35% < 65% 非言語 ノンバーバル

//非言語コミュニケーション研究のリーダーの一人、レイ・L・バードウィステルは、対人コミュニケーションをつぎのように分析している——「二者間の対話では、ことばによって伝えられるメッセージ(コミュニケーションの内容)は、全体の35パーセントにすぎず、残りの65パーセントは、話しぶり、動作、ジェスチャー、相手との間(ま)のとり方など、ことば以外の手段によって伝えられる」と。//マジョリー・F・ヴァーガス『非言語コミュニケーション』新潮社 1987年 p15

### 9つの**非言語メディア**

①**人体** コミュニケーション当事者の遺伝因子に関わるもろもろの身体的特徴の中で、なんらかのメッセージを表すもの。たとえば性別、年齢、体格、皮膚の色など

- ②**動作** 人体の姿勢や動きで表現されるもの ③**目**「視線の交差(アイ・コンタクト)」と目つき ④**周辺言語** 話しことばに付随する音声上の性状と特徴 ⑤**沈黙** ⑥**身体接触** 相手の身体に接触すること、またはその代替行為による表現 ⑦**对人的空間** コミュニケーションのために人間が利用する空間 ⑧**時間** 文化形態と生理学の2つの次元での時間 ⑨**色彩**

# 神経神話



「右脳」や「左脳」という言葉は学術的には存在しない。脳は左右の半球に分かれていて、「大脳右半球」あるいは「大脳左半球」を「右脳／左脳」と短縮形で便宜的に呼称しているにすぎない。両半球に分かれていても「脳は一つ」である。

ところで、言語などは左半球に、空間認識などは右半球に、「局在」していることを根拠に、「脳は左右別な働きをする」という誤解をまねくような教養書が脳神経学者（または科学者）による多くの本がある。専門知識を持ち合わせない一般人は局在を"おもしろい"とってしまう。

幼児教育の現場では—— おとな（先生）は、子どもと向き合って、これからすることや約束事を指示するとき、子どもに理解を求め自主性を促す。伝達方法では手遊びを頻繁につかう。おとなの動作を子どもは右脳で受け止める。言語中枢とも言われる左脳はまだ発達途中だ。

5歳頃になると左脳が働き者になる。人間の思考は、言語に変換しながら働く。仮名を覚えるようになると、手遊びは必要でなくなる。文字が読め、簡単な計算ができるようになると学習の到達度を、おとなも子自身も意識するようになる。

さて、右脳／左脳で論理を展開してきた。なるほどと思うかもだが、ある脳神経科学テキストだと、「脳の局在」理解に注釈がつく。右脳／左脳は「**神経神話**」である、と。左半球に局在しているが、右半球が働いている人もいる。判明していないだけだ。

確定に至っていないが、科学者が発信源になって流布された**神経神話**は、ほかにもある。

- 三歳児神話
- 発達の臨界期
- 10%ときには20%の脳しか使われていない
- 男の脳、女の脳
- 記憶力をつける
- 睡眠学習の効果

これらは間違っているというわけではない。正しいとしても、その理解のしかたが過剰になりやすい。

OECD教育研究革新センター

『脳からみた学習』

明石書店 2010年 p169~200

第6章「神経神話」の払拭

——に詳しい

## 発達段階(臨界期)

について、わたしはこだわりがある。が、あくまで目安であり、対象児童の生活環境など個々の事情と理解が大切で、その意味で日々の観察をおろそかにしないこと。

——これに尽きる



資料通番15.ver.01 The Renaissance of Childhood 2024.2.4

子供、子ども、子どもたち、等々の表記

神経神話

山田利行

拡散歓迎 複写可（許諾無用） <https://193pub.com/>